〔論文〕

現代的福祉サービス提供の課題と展望
―東大阪市の自主的研究会（カフェ・ふくろう）の実践を通じて―

山　本　永　人

はじめに

「カフェ・ふくろう」は東大阪市の特定非営利活動法人ライフ＆ケアのショップさくらを間借りした、社会福祉事業者関係の語りの場である。もともとはジャーナリズムの源流であるイギリスのカフェをモデルとして、福祉にかかわる人々が気軽に集い、その思いや考えを交換できる居場所としての役割を果たすものとして誕生した。発案は市内にある社会福祉事業団のOBによるもので、彼の人間関係を軸としながら、毎月第二金曜日の夜にそれぞれの体験の中から情報交換したり、愚痴を語らったりする息抜きの場として、2014年４月より息長く活動している。当初は単に、同じ仕事をする仲間の情報交換や息抜きが目的であったが、徐々にその活動が広がりを見せ、語りを何かの形で残そうという企画が持ち上がった。その結果として、現在まで２つの支援者のストーリーが完成している。

さて、本研究は東大阪市の自主的研究会（カフェ・ふくろう）でディベートされた内容を根拠とし、現代的福祉サービスの課題と展望を明らかにする研究である。

１．研究方法と倫理的配慮

2015年４月から2020年２月まで東大阪市のカフェ・ふくろうで話された内容をナラティブ形式で15回抽出し、そのことにより現代的福祉サービス提供の課題と展望を考えるものとする。

研究対象者には研究の趣旨を伝え、本研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されないようにすることを説明した。

２．自主的研究会（カフェ・ふくろう）の実践

カフェ・ふくろうでのディベートの内容を時系列で抽出し、ナラティブな形式に従い紹介する。

１）知的障害者のグループホームの課題【2015.12.４】

今回の話題提供はグループホームにおける知的障害者の生活支援における問題である。グループホームは先回のカフェ・ふくろうでも話題になったが、もともとは欧米から生まれた発想であり、

それぞれの国によってもナーシイングホームに代表されるように性格が異なってくる。我が国のグループホームは施設の代替品という役割が大きい。

実際、筆者が東大阪市の社会福祉法人で仕事をしている時も、母親ががんにおかれた知的障害の女性の生活保障を行うためにグループホームを立ち上げたという経過も存在する。支援費支給方式の改革も財政的な裏付けとともに追い風になり、当時の東大阪市における社会福祉法人の中では、グループホームづくりが一大ブームになっていた。

本来的には本人の自立を促すための、グループホームが、今までの施設が担ってきた知的障害者の生活保障の場になっているという現実がある。

カフェ・ふくろうでは、「親の責任」なのか「職員の責任」なのかという話が中心に進んでいく。その中でも成年後見制度とその限界について話が及んだ。それぞれのグループホームでも様々な事例が紹介される。

その中でも、医療同意の問題が挙げられた。グループホームで激しい腹痛を起こした利用者を救急搬送することになった。世話人は手が離せないので事業所の代表者が呼び出され、バイクで当該病院に駆け付けたそうである。診察の結果は急性盲腸炎とのことで緊急手術が必要であるとのことであった。医者は同行した職員に手術の同意書を家族にサインすることを求めたとのことである。

家族が捕まらない。何度も電話をするが応答がない。時間ばかりが過ぎ、大変な思いをしたという報告である。この話がしてくれたグループホームの職員が述べた言葉が印象的だ。「誰の責任なのか。正直言って、グループホームの職員の判断でサインするのは責任が重すぎる。はっきり言って家族は逃げている。」

これに対して、看護師の資格のある職員からは、実際の病院の窓口でも、施設やグループホームの職員が救急搬送等で病院に付き添うって来るケースが多い。しかし、病状の経過や詳細を問い合わせると、僕は今日だけの担当だからと付き添いからはなにも情報を得ることができなかったという話がなされた。

社会福祉基礎構造改革のひとつの要点は、本人主体の契約によるサービスの実施ということが大きな柱である。しかしながら、契約が困難な人々の代理をできる成年後見人は医療同意権は認めらない。また、成年後見人は生きている人がその対象と限定される。今後、グループホームが本格的に親亡き後の生活保障の機能を有するためには、大きな課題である。話の中で、もしかするとグループホームの中で息を引き取る知的障害者も存在する可能性があるとの話が出された。実際の成年後見人の中でも、自身がかかわった被後見人のために、手弁当でお葬式、埋葬の手続きを進めたそうである。

「誰に責任があるのか。」

重い問いかけである。

２） 高齢知的障害者について【2016.6.3】

障害者支援施設「なにわの里」のスタッフから相談。同施設は、柏原市の国分にある、自閉症支援では府下でも有名な施設である。Ｔさん（64）男性は、そのグループホームに居住している。両親は他界、大阪市内に叔父が住んでいる。成年後見制度等は利用していない。簡単な会話は充分に成立する。年齢を重ねるごとに廃用性や認知の問題も出現し、排泄、入浴に一定の介護が必要な状態。

65歳の誕生日を目前に控え、介護保険への移行をはからなければならなくなった。グループホームは障害者総合支援制度の対象であるので、「なにわの里」のスタッフは近隣の特別養護老人ホームに入所の打診をおこなったが、知的障害であるということが判明するとやんわりと断られている。

叔父が大阪市北区に在住していることなどの条件から、Ｔさんの入所を斡旋してくれるキーパーソンはいないかどうか相談された。

このケースでのディスカッションのポイントとして、そもそもＴさんはどこで生活するのが一番良いのか、障害者支援と高齢者支援の制度のはざまで苦労する施設職員の悩みが透けて見える思いがする。現状の社会保障は地域での一人暮らしを求めているがそれに耐えきれない人の存在は大きい。また、介護保険優先の行政の考え方は知的障害者の高齢化の問題に大きな影を落とす。認知症を発症した自閉症者の支援に適する施設など現状存在しない。

また、話は進んで、特別養護老人ホームの実情にも話題はひろがった。100人待ちや200人待ちが当たり前だった特養に空床減少が生じている。サービス付き高齢者専用住宅の登場が大きい。生活保護制度利用者はほぼこちらへ流れたとの話である。とくに大阪市を中心としたドーナツ地帯にはその傾向が強いとされている。ここでも、社会福祉基礎構造改革が目指したものとはなんだったのかという話題が盛り上がった。福祉は誰のものであるのか。経営としての視点と福祉の使命は果たして両立するのだろうかという疑問である。

この相談の回答としての対象は、地域包括支援センターや相談事業者、成年後見人等があげられる。社会資源がまったく存在しないわけではない。とするならば、そのつなぎ方が問題になるのか、そもそもＴさんのようなケースが今まで存在しなかったという現状の最先端の問題であるのか、今後の検証が待たれるところである。

３）Ｕさんのおこしたボヤ【2017.7.7】

市町村には接触困難な当事者は応々にして存在する。筆者の体験の中でも、飼い犬に石を投げたり、ピンポンダッシュをしたりと問題を起こす利用者がいた。何度も無断外出を繰りかえしては、結局警察のお世話になったりする。

Ｕさんもそのような経歴をもつ人である。丸っこい体に人懐っこい笑顔はいいのだが、いったん機嫌を損ねると大変である。足の悪いＵさんは、常に杖を突いた状態なのだが、それが凶器になる。

暴力をふるう。いったんそのようなイメージがついてしまうと支援者側の施設は腰が引けてしまう。

この日のカフェ・ふくろうは深刻な雰囲気に包まれていた。いつも冗談口をたたく主宰のK氏は眉間にしわを寄せ、黙り込んだ。さくらのMさんは電話での連絡に余念がない。Uさんがグループホームでボヤ騒ぎをおこしたのだ。その法人は、彼をよほど腹に据えかねたらしく、Uさんのこれ以上の支援は全面的に断るとの話であった。つまり、法人から三下り半を突き付けられたことになるのだ。今日、夜露をしのぐ場所もない。まさに追い出されたといっても過言ではない。

カフェ・ふくろうの役割は、当事者も含めた支援者同士の緩やかなつながりにある。K氏は愚痴をこぼしあう居場所をつくるという考えをお持ちだったようだが、今回はK氏のもう一つの狙いが的を得る形になる。

カフェのメンバーにはベテランの相談員が何人か参加していた。そのネットワークが強いのだ。Uさんはすでにメンバーの中では顔なじみ。本日のカフェは、Uさんのためのケア会議に変身したのである。

極めつけの助っ人が現れる。大阪市でグループホームや訪問介護を運営するSさんだ。Sさんはアイディアマンで、大阪市の訪問事業を行うにあたり、職員にバイクの中型免許の取得を求めた。もちろん、経費は事業者持ちである。機動性に着目する。少ない人数で、効率よく狭い住宅街を移動するためのアイディアだ。

「いいですよ。Uさんをひきうけましょう。」

冒頭で筆者が担当した当事者を引き受けてくれる施設は見つからなかった。このままでは自殺するしかいないという高齢の母親と当事者を軽自動車に乗せ、手当たり次第に施設を回った。

「たしかに問題行動はあります。異食行動や無断外出、力も強いつよい。でも、本当にいい人なんです。短い期間でいいから預かってほしい。」

１人の施設スタッフが答えた。

「なぜ、嘘でもいいからこの人は問題のない、素直な人だと言わない。異食や外出がある問題行動の多い利用者を施設はあるもんか。」

その経験がSさんの発言の凄さを身に染みて感じさせる。

カフェ・ふくろうにくればなんとかなる。主宰のK氏の言葉の意味が何となく理解できる。K氏は会心の笑顔だった。

４）消えた雄勝の町【2017.12.7】

最初にカフェ・ふくろうの話題になったのは、高齢の知的障害者支援の問題だった。それは、身近に事業者や支援者が困惑するケースがあったからだ。しかし、何回かカフェを重ねるたびに、様々な支援者の体験や思い出話がテーマとなるようになった。

2011年におきた東日本大震災の経験も忘れ難いテーマとして、さくらのスタッフと筆者がこの日

の話題提供者となったのである。Mさんの獅子奮迅の武勇談はメンバーの皆を魅了した。そして、筆者はこの年の秋に仙台で開かれた学会の帰りに立ち寄った雄勝の町にある特別養護老人ホーム「雄心園」の話を報告した。

雄勝の町は、原発で有名な女川から近い、リアス式海岸の典型的な穏やかな漁師町である。緑色の入り江には波一つもない平和そのものの町であった。雄心園はその中心街から山を登った、町を見下ろす高台に建てられていた。先代の卓見で、津波の襲来を予想し、岩盤の固い小高い岬の上にその建物は建っていた。

所長のMさんは、本当に変哲もない普通のお母さんという風貌であるだけに、彼女の体験談は真にせまった話で、聴き手のこころを鷲掴みにしてしまう。かく言う筆者も話に引き込まれ、涙を止めることのできない一時間だった。

あの日、雄勝の町に黒々とした波が押し寄せた。信じがたい光景はMさんの目の前で起きる。消防署が、警察が、そして病院が、救助に来るはずの人々が真っ先に波にのまれた。地震の被害を想定していた建物に物理的な損害はほとんどなかった。でも、そこにある現実は数十名の利用者とスタッフたちの８日間にわたるサバイバル生活の始まりに他ならなかった。さらに、驚くべき事態がMさんに襲いかかる。町から人々が避難してくるのだ。赤ちゃんを抱いたお母さん、身を寄せるように坂道を上る老夫婦。たまたま雄勝で仕事をしていた、黄色いヘルメットの作業員。津波が押し寄せた日は粉雪が降る寒い一日だった。

少ない食料、そしてなんといっても足りない医薬品、そして交代の来ないシフト。難題を乗り越え、初めて自衛隊の救助が届くのが地震発生から８日目のことであったそうである。さまざまな貴重な話を聞くことができた。車の燃料を常に満タンにしている習慣が助かったことや、石油式のストーブが調理器具として重宝すること、非難してきた住民の自治組織の立ち上げや、自衛隊の縦割り組織の連絡網の話など興味は尽きない。

でも、一番カフェのなかで、メンバーの印象に残ったのが介護福祉士たちの奮闘である。彼らに交代はこない。そして、家族の消息も分からない。雄心園で働くスタッフの中には。あの大川小学校に通う子どもさんの親も働いていたそうである。夜の玄関口で泣いているスタッフも利用者の前ではプロフェッショナルの姿を崩さない。疲労と焦りが重なる中でも彼らは逃げだすことはなかった。雄心園での継続した利用者の支援は無理である。被害の少ない山形や福島に利用者を退避させる。利用者がヘリに乗せられる瞬間まで、スタッフは手書きで彼らの情報をできるだけ詳しく資料に書き込んだ。介護福祉士がかっこいいと素直に筆者は思えた。

でも、その介護の仕事をしようという若者たちは減っている。むしろ、高校などの訪問授業にいくとはっきりとこういわれる。

「介護は嫌いだ。」

むろん、控えめに表現する学生もいる。

「大切な仕事はわかっている。でも、私にはどうしてもできない。」

と、ショートカットの生徒が答えた。

「どうして。」

と、たずねると

「だって、人の排せつ物を触るのはＮＧやわ。」

会を重ねるたびに、筆者の仕事の関係もあるのだが、介護の若者離れの話がよく出るようになった。

５）Ｋさんの本づくり（支援するもの、されるもの）【2018.２.２】

本づくりの話が本格化する。第２弾を筆者が作成したストーリー本の後をうけてメンバーのＴさんに第３弾の白羽の矢が立った。彼は、高校時代にオートバイで転倒事故を起こし、側頭部を強打した。応急処置を受け、目が覚めた時は事故の時点から３年前の記憶がなくなっていた。

「高次脳機能障害、ぼくの診断名です。」

屈託もなく笑う、Ｔさんは子どもが好きな好青年である。でも、支援者に対する彼の視線は外見の温厚さとは違う厳しいものであった。

本の編集を誰かが手伝う必要があった。文章を書くことに慣れていない彼の文章はとにかく繰り返しが多く読みづらい。そして、文章は怒りに満ちていた。教科書への激しい攻撃、支援者への容赦のない否定。いつしか、彼との対話はその怒りの抑制と整理に時間が使われていくことになった。

「教科書はできないばかりでしょ。でも、僕は工夫をすればできます。真実をみてほしいのです。」

カフェの経過報告でも、よく彼はそのような発言をする。

「でも、カフェの支援があったからこそ、新しい仕事も見つかったのと違うの。」

カフェの主宰者のＫ氏が諭すように話しかける。

「それは、感謝しているんですね。でも、支援者は僕のできることを奪います。好きにはなれません。」

カフェの一つの効能は、集まっている人々の緩やかなネットワークである。こんな人がいるよ。そしたらこのアイディアはどう。カフェの会話のなかで瓢箪から駒のような成果が生まれることもある。Ｋさんはある意味、カフェ・ふくろうの受益者という表現ができる。

彼との本作りは難渋した。繰り返し、繰り返し怒りの言葉を解きほぐしていく。でも、その経験の中で、はからずとも筆者はＫさんが歩んできた道程を追体験できる機会をえた。その中でも、ゴールから逆算して行動を組み立てるというエピソードが興味深い。誰かの家に行くには、その到着の時間から、途中の目印を想定して時間を組み立てる。結果として出発時間が決まる。この出発時間の変更が困難であるとの由だ。それをすればすべてが崩れてしまう。

なんとなく、Ｋさんとの付き合いの中で、筆者との間に無言の約束事が形成される。そのことさえ守れば、Ｋさんとの付き合いは何らトラブルが起こらない。彼は基本的に気の合う好青年である。

だが、その約束事や配慮はＫさんが心掛ける場合もあるが、当然筆者自身が配慮する場面もある。例えば、見知らぬ土地に彼と出向くときはできるだけ目立つ位置に、つまり彼のメルクマールにな

るよう心掛けている。

それは、支援なのだろうか。理解なのだろうか。支援をすることに感謝は求められるべきなのか。「ありがとう」の一言もあってもよいのでは。

案外、大きな問題かもしれない。Kさんは、様々な共同作業を行う際に、支援者との間に小さな溝ができると表現する。カフェのメンバーはほとんどがこの支援者である。悪意のない支援者への追及にメンバーが黙り込んだのが印象的であった。

6）パイオニアの奮闘【2018.4.6】

Tさんはふくよかの女性である。よくしゃべり、よく笑う。彼女がカフェ・ふくろうに来ると雰囲気が明るくなる。カフェ・ふくろうに集まる若い事業者たちは福祉を専門とする学問をした人間よりも、むしろ他分野から参入した転向組が多い。彼らの出身はIT企業やビジネスが大半である。ある青年は、この仕事について「命をかける」仕事につけたと呟いたのは印象的であった。前の経営マネジメントで相当の成功をおさめたのに、彼はいまの福祉の事業を選んだのである。

さて、この回のカフェ・ふくろうの話題提供はTさんだった。Tさんが持ち出したケースは偶然にも筆者と縁のあるものだった。学校関係で付き合いのある人の話だったのである。むろん学校上の付き合いの中では、その親子に問題があるとは気が付かなかった。

Tさんに私がケースの橋渡しをしたわけではない。Tさんの関わった子どものケースの母親がたまたま私の知り合いだったというわけである。

不登校の問題がきっかけである。ネグレクトが疑われた。ただ児童相談所が関わるような深刻なケースではない。この深刻ではないというところに問題点が隠れている。どのような経過があってTさんの事業所がこの母子家庭に関わることになったかの詳細はつまびらかではないが、Tさんはこの母親に振り回される経験を話してくれた。

家のなかはペットボトルだらけの足の踏み場もない乱雑な環境だそうである。一見、普通に携帯電話をいじりながら、親子は暮らしを続けている。ただ、子どもが食事をした形跡はない。食べるものはないのだ。服装も、髪形も、注意をすれば汚れていることはわかる。いつも同じ服を着ている。でも、それが目立つほどのものではない。ただ、何か強い違和感が残る。ほってはおけない、何らかの事情をTさんは感じたそうだ。

介入への取り組みが始まる。せめて、子どもの不登校について母親と話をしたい。Tさんはそう考えた。だが、母親と約束をしてはすっぽかされる。喫茶店に呼び出しても、あらわれる気配はない。1時間や2時間待たされるのもいつもの事だ。そして、ようやくあらわれた母親は、時間に遅刻したことにはなにも触れずに、延々と自分の話をする。そうかとおもえば、別の用事を思い出し、あたふたと席を立つ。肝心の話は一向にできない。その繰り返しが続いたそうである。

「疲れるんですよ、どうしても。」

明朗なＴさんが沈んだ声で、ため息をつく。

このケースは深刻なのだろうか。子どもの不登校の問題、そしてネグレクトの疑い、その背景に母親の多動で衝動的な行動がある。ADHDの症状を持ち出すまでもなく、母親の注意の転動性は目を引く。なんともできない無力感がカフェを包み込む。このまま見守るしかない。それなりに親子は暮らしていくだろう。時々様子をみて適切にアドバイスすべきである。そんな結論しかでない。それは、結論と言えるのかも疑わしい。

子ども食堂に代表されるように、地域の中で子育て世代への支援が手探りで始まっている。それは評価すべきことではあるが、問題は想像以上に大きいのかもしれない。ひとり親の相対的貧困率が50.8％と異常な高さを示す私たちの社会で、不幸は沈黙していると感じるカフェだった。

７）長島愛生園訪問記【2019.３.１】

長島愛生園からみえる瀬戸内海はちょうど昼過ぎの鏡のような凪で、照り返す日差しは小春日和には少し暖かすぎるように思えた。友人の教員に誘われ、学生の引率ついでに訪れた国立療養所長島愛生園でのなまかじりの見学体験をカフェ・ふくろうで話題提供することとした。

ハンセン病の歴史は福祉の話題としては格好のものであると考えている。国立療養所の設立は明らかに善意から生まれたものである。当時、業病と恐れられ、病気の感染が判明すれば、家族とも一切縁が切られ、大変な人権侵害の被害者を産み出したこの一連の歴史も、元をただせば、偏見に苦しみ、症状に悩まされる患者を収容し、救済するために収容所を開設しようとしたひとりの医師の努力からはじまっている。

記念館の案内を担当いただいた聡明な女性の説明をそのまま受け売りをして、現在収容されている人々の平均年齢や、戸籍の問題、またその収容者に感染者はいないことなど、得々と話をした。メンバーたちはみんな神妙な表情である。それはそうであろう。しらないことほど怖いことはないと腹のなかで思っていた。

でも、この話には後日談がある。ことあるごとにこの隔離の問題がディスカッションの中にでてくることが多くなった。コロナ感染の関連である。なにもかもわからないままに新型コロナウイルス感染は拡大した。そのきっかけになったのが、ダイヤモンドプリンセス号のクラスター事件である。カフェ・ふくろうで話題になったのは、当時時間の経過とともにワイドショー的に報告された乗客、乗員の上陸問題であった。乗客を降ろすのか降ろさないのか、ちょっとしたディベートが会の中で巻き起こった。降ろさないのは当然である。いや、乗客の立場はどうなる。クラスターの場となった豪華客船に閉じ込められるのは人権侵害ではないのか。

福祉の正義とは何だろうか。そんな疑問が湧いてきた。大多数の安全か、当事者の人権か。

初春の長島を歩きながら考えていた。たくさんの人々が大多数の安全のためにこの島に集められた。桟橋から先には家族さえ上陸することはできない。名前を奪われ、避妊手術が条件の患者同士

の婚姻が進められる。むろん、歴史の経過の中で、そのような誤った施策は改善されていく。しかし、故郷を名前を、そして今までの人生までも奪われた人々の歴史は戻らない。自分の本名さえ名乗ることなく、愛生園の墓地に眠りにつく人々。そして、その人々の系譜はいまや途絶えようとして、愛生園の歴史にも終止符が打たれる。

社会福祉士の倫理綱領のなかにも明示される我々対人援助職の共通基盤である社会正義とはなにをしめすのだろうか。

一人のメンバーが答えた。

「そんなものは綺麗ごとだよ。それよりも目の前の人をどうすればいいのかで精いっぱいだ。その人を見過ごすことができない。それだけのことなんだ。」

考え込んでしまった。

8） 胃ろうと透析【2019.4.5】

メンバーのＳさんのパートナー、Ｈさんはベテランの看護師さんである。どこか、憎めないＳさんの風貌にひかれたのか、それとも仕事の理念が共有したのか、訪問看護をグループホームにミックスするという事業をＳさんとともに取り組むこととなったそうである。

本日のカフェ・ふくろうはこのＨさんが話題提供者になった。医療と福祉をどこで線引きするかは、高齢者福祉の大きな課題である。介護保険の導入は当初、医療保険と介護保険のすみわけを命題として、その役割分担をはたそうとしたものであるが成功したとは言えない。療養型介護医療施設の迷走や経管栄養や胃ろうなどの一部医行為の介護福祉士への解禁等はその証左であろう。

すこし度のきつい眼鏡とソバージュの髪をかき上げながら、Ｈさんは訥々としゃべりだした。はじめての福祉事業の体験や知的障害者との出会い、彼らの地域生活に触れる新鮮な感覚を生き生きと述べられていた。

その延長線での出来事である。きっかけは筆者が持参した新聞記事である。そこには透析をやめる判断をした老夫婦の決断が報じられていた。大腿骨を骨折したことを契機に入院をしたご婦人は、重い慢性腎不全であった。日に日に血管も細くなっていく彼女の注射に2時間もの時間がたつことも珍しいことでなくなっていった。

「お父さん、透析治療をあきらめよう。お家でいいよ。」

「死んでしまうよ。あきらめないで。」

在宅での死を希望する夫婦が決断するには時間がからなかったとの由である。苦しみながらも満足そうな最後だったようだ。

カフェにはＲ氏という住職や、労災保険の訪問事業に携わるＯさんもいた。

「何のための医療かわからない時があるよ。だれが儲けているのか。」

住職のＫ氏が写真をメンバーに配る。そこには可愛らしい桜の苗が何個か写っていた。

Ｒ氏の子どもには障害がある。子どもが小さいときに通った旧、東大阪市療育センターの桜の木だ。主宰のＫ氏をはじめ、カフェのメンバーはこの療育センターと縁が深いメンバーが数人いる。筆者も児童指導員として10年近く勤めた経過がある。

知る人ぞ知る中新井邦夫ドクターは療育センターの創始者である。その奮闘は向井章子さんのルポタージュ『たたかいは命果てるまで』が詳しく述べている。筆者はその薫陶をうけることは残念ながら機会がなかったが、いまだにドクターを崇拝する人は多い。ドクターのエピソードはさまざま聞くが、

「何のための医療なのか。」

Ｏさんの呟きは重い。

胃ろうにしろ、透析にしろ延命技術としては優れた福音であろうが、それが本当の意味での当事者の幸せにつながっているのだろうか。経済の流れの一環としての医療であるならばその功罪は問い直されるべきものであろう。

知的障害者の地域生活支援においてはなんとしても医療のエッセンスが必要である。

ＳさんとＨさんのその先駆者としのパートナーシップは眩しいばかりである。

９）職員がうけるハラスメント【2019.５.10】

きっかけは2017年の暮れ、寝屋川市で起こった精神障害者の自宅監禁事件である。彼女の自宅での監禁は十数年に及び、周囲の人間が異様に思うほどのフェンスの設置や複数の監視カメラのことは、新聞報道でも繰りかえし強調された点である。精神障害者への社会的な偏見や誤った解釈が背景にあることも見逃せない。

しかし、カフェ・ふくろうでの論議は、そのようなマスコミ的な話に終始することはなかった。このカフェでよく出てくることだ。もちろん今回の事件の加害者が免罪されるわけではないが、家族の立場から考えれば視点も変わってくるという論議になった。

この時期、よく障害者施設での暴力事件が頻発し、その都度マスコミにおいても競ったような報道が目立った。その人権的な潮流は大いに歓迎するべきだという反面、自分たちも加害者と同じような立場になればどのような態度に出るのかという問いかけがなされる中、事業所で働く女性から施設職員が受ける暴力の問題はどう取り扱うべきかという投げかけがなされたのである。

ある調査の報告では、ハラスメントを受けたことのある職員の１割～２割は怪我や病気を抱えてしまったとの状況や仕事を辞めたいと思った職員の割合は業種にもよるが２割～４割にのぼるということが話題となる。とくに、認知症の問題が顕在化した昨今、そのような事例は枚挙にいとまがない。

「年寄りを施設に入れる家族も共犯だぜ。文句ばっかり垂れあがって」

無論、言語道断な発言であるが、介護を担う職員の精神的な根底に流れる本音を言い当てているのかもしれない。カフェは重苦しい雰囲気に包まれた。

先ほどの女性が、暴力は身体的なものよりも心理的なものほうが身に応えると話していたのが印象的である。また、問題になるのがそのようなストレスにさらされた場合の周りの職員、とくに上司の反応である。ときに、事なかれ主義の上司は、プロであることを理由にそのようなことは流してしまうべきだとという言葉をつかうことが多々あるというメンバーの話からも窺われた。

あるヘルパーさんは、ある男性利用者から胸を触られることが悩みの種だった。勇気をもって先輩に相談すると、

「それはあなたが未熟なのよ。そのようなことも上手にこなすのが熟練したヘルパーであるのよ。」

という返事だったそうである。

問題行動がある利用者の制止行動は暴力との端境が難しい。グレーゾーンが大きいのである。しかしながら、支援者が被害者となった場合の端境の論議は支援者側に世界ではよく話されているにも関わらずその社会的認知は低いと言わざるを得ない。

10）　宙に浮く知的障害者【2019.6.14】

今回は8050問題をカフェの話題に取り上げた。それには訳がある。カフェの仲間の共通の知り合いＩ氏がアルツハイマー型認知症を発症したということを耳にしたからである。彼には自閉症の息子さんがいる。女性の兄弟もいたようにおもうがその関係性についてはよくわからない。

Ｉ氏は、一口で言うとやり手の人だった。施設では親の会を統率し、その後、そのメンバーを中心に社会福祉法人を立ち上げ、その理事長におさまった。やり方にはいろんな意見もあったが、剛腕という印象が強い。なによりも、大切な息子のためという使命感が大きかったのだろう。

息子さんは、きっちりした性格で、授産施設でもエース級の働き手であった。自身、自転車の乗り、気に入った職員の家になら何キロも走らせて訪ねていくような人であった。だが、彼の自閉は相当度に重く、食事や身の回りの世話は欠かせない。

8050問題は、障害者やひきこもりの当事者と同居する親の高齢化の問題である。80歳のアルツハイマーの母親と50歳の精神障害の子どもが同居する。収入は母親の年金である。冷蔵庫にある、いつ購入したかわからない食材を、アルツハイマーの母親が息子のために調理する。息子は部屋に閉じこもりのままであるなどというケースはよく耳にする。

カフェでも話題となったが、知的障害者の支援を考えるとき、その自立は親の問題と大きくリンクする。この障害の特性であるが、知的障害者の人が地域で暮らしていくには、身体的な介護はあまり必要でなく、むしろ、見守り・声がけという身上監護が重要な問題となる。つまり、その人の状況にもよるが、ひと時も目が離せないひとがいるという問題が大きい。

Ｋさんの息子さんの場合は、それほど密着した支援は必要ないが、彼の生活上の重要な決め事やその方向性はＩ氏の意志のもとに決められていた実態がある。Ｉ氏のアルツハイマー発症は、むろんその程度にもよるが、息子さんのアドボケイトができなくなったことを意味する。

つまり、息子さんは宙に浮いてしまった状態だというのである。

むろん、Ｉ氏の立ち上げた社会福祉法人のスタッフたちも動いた。グループホームの入所を含め、息子さんの援助に乗り出そうとしたのだ。でも、電話口にでた、Ｉ氏の反応は意外なものだった。頑なな介入拒否だったそうである。

「ほっといてくれ。」

の一点張り。あとは、意味不明の言葉が続いたとの話を聞いた。

実態からの知的障害者の支援は、親とのセットで動かないとほとんど成功しない。カフェのベテランスタッフが語った。では、上記のケースの場合はどうすればいいのだろうか。

息子さんは、今でも時々工場街を自転車で走り回っている姿を見かけるとの事である。服装も乱れた様子もなく、栄養状態も悪くなさそうだ。おそらく、兄弟をはじめ家族的な支援を十分に受けているのだろう。だが、問題は福祉の専門といわれる人々から、なんといっても父親が心血注いで作り上げた社会福祉法人から関係性が切れてしまったという事実である。知的障害者の8050問題の難しさを垣間見たようなカフェであった。

11）れいわ新撰組の登場【2019.９.13】

７月の衆議院選挙でれいわ新撰組が2議席獲得した。代表の山本太郎氏は周知のとおり自らが国会議員になることを選択せず、重度の障害者を国会議員として送り出したことを選択したのである。

この日の、カフェ・ふくろうではこのことが話題となった。

車いすの重度の障害のある人が国会議事堂に参議院議員として登場する姿はテレビ等でも一定の興味をもって紹介された。もちろん、山本氏の戦略を諸手をあげて称賛するわけではないが、やはりその意義は大きいというのがカフェのおおむねの意見だ。

さまざまなことがマスコミを通じて流れてくる。基本的に車いすの議員席が想定されていないので、急ピッチで改修工事に入ったこと、国会議事堂での障害者トイレの問題や、議員となる彼らの横になる場所の確保など、まさに設備におけるバリアフリーの問題、そして興味深いのが、障害者総合支援制度における重度訪問介護が働く障害者には受けることのできない制度的なバリアの問題など、福祉サービスに携わっているものでも分野違いであるとわからない盲点などが話された。

生産性のないものが国会議員になることの是非がSNSなどで批判的に取り上げられているとの話にカフェのメンバーの話は広がっていく。

たとえば、就労継続支援Ａ型の話。一般就労を目指すこのサービスの報酬単価は事業者にとっては魅力的だ。しかし、基本１年間で一般の就職を目指すとなれば一つの問題に突き当たる。目指すべき利用者の一般就労は事業者の視点で見れば喜ばしい反面、報酬単価を得られる利用者を喪失することに繋がる矛盾点だ。

奈良で事業所を経営するＹさんがため息をついた。

「利用者の事を思えば思うほど赤字が嵩んでしまう。」

実際に放課後児童ディサービスを運営するＴさんもその意見にうなずく。支援学校の校門前の道にはたくさんの事業者が障害のある子どもを迎えに来る。その姿はひと昔前にはなかった光景だ。ただ、デイサービスの内容は様々である。自閉症を中心とした発達障害の子どもたちの支援は一筋縄ではいかない。様々なよくない噂が飛び交う。

「子どもたちのためにと思うと赤字になるわ。」

労働力のない人間をいかにして働かせるのか。そのために自分たちは働いているのか。

「なんとか、工夫はできるものだ。そのタイミングとしかけが大事なんだ。」

主宰のＫ氏が話す。

れいわ新撰組があけた風穴とはなにか。それは、介護の必要な人が国民の代表として国会議員になったという事実であろう。そこには、根本的な問いかけが存在するような気がしてならない。働くこととはなにか。そして、そのことは本当の意味での私たちの幸せにつながるのか。

重度訪問介護や就労継続支援、放課後児童デイサービス。いずれにしろその制度設計は事業者の収益に直結する。その枠組みから逸脱するものは利益とならない。事業者は撤退せざるを終えない。

ベテランのＭさんがカフェをしめた。

「昔の措置制度はよかったなぁ。」

12）　ソサエティ5.0の登場－仙台介養協の報告－【2019.11.８】

日本介護福祉士養成施設協会という組織が存在する。簡単に言うと、介護福祉士を目指す学生の資格取得を目指す学校の全国組織である。学校も厚労省視点でいえば施設というわけである。今年は仙台で全国教職員研修会があり、その発表が面白かったのでカフェで話題にしてみた。

ソサエティ5.0という言葉は最近よく使われるようになってきた。サーバー空間とフィジカル空間の融合がもたらす新たな未来社会というわけである。たしかにものすごいとしか言いようがない。サーバー空間にアバターが現れ、日本語を英語に翻訳してくれる。聞きなれた機械音での翻訳ではない。アバターはその人の表情や癖、語感まで再現する。つまり、日本語でしゃべっている質感そのもののコピーを英語でサーバー空間に再現するというデモンストレーションだ。その人の声音で、その人のしゃべり方で翻訳するのだ。もう、通訳はいらない。

講師は、日本はIT後進国だと断言していた。とくに教育の場面では著しい。スマホを利用するならともかく取り上げる高校は珍しいそうだ。スマホの台数は世界人口を優に越えている。このままでは機械でできない仕事は存在しなくなるのかもしれない。

フロアーでも、質問が出た。

「介護は仕事としてなくなっていくものなのか。」

講師は、なくなることはないだろうと述べたがその保証はない。

カフェでもその話が盛り上がった。

「結局、ケアは人の手でするものなのか、機械が成り代われるものなのか。」

フロアーの教員もカフェのメンバーも明確な答えを導き出すことは困難なようである。ケアを人格と人格のコミュニケーションと位置づけ、その影響のもとに新しい暮らしを創造するもとするならば機械にとって代わられることはないはずである。

しかし、介護の仕事がなくなってしまう可能性を予見させる出来事が仙台であった。研修会はおおむね２泊３日で行われ、２日目の晩には懇親会が行われるのが恒例である。当日、筆者のテーブルには4人の教員が同席をした。その教員の所属する養成校がすべて募集停止や廃止であることが判明した。教員たちは皆新しい仕事を探すことになる。そして、その行先は教育現場ではなく福祉現場だそうだ。

2000年の介護保険導入に伴い、介護福祉士の養成校として、全国でも沢山の学校や短期大学、４年制大学が名乗りを上げたことは周知のとおりである。筆者を含め、数多くの現場経験者が教員として採用された。その時はまさにバブルの感がある。介護を目指す若者が集まらない。苦し紛れに外国人留学生を導入する。でも、根本的な解決にはならない。むしろ、外国人留学生や社会人の優遇は、一般の受験生にとってマイナスイメージにつながったという感じさえ持ててしまう。カフェは自由に愚痴を言い合うことのできるところがよい。最近の筆者はこの愚痴が増えてしまった。

「学生が集まらない。」

介護の仕事はなにをして特性とすることができるのか、価値とすることができるのか。

電車やバスの運転手やコンビニの販売員、スーパーのレジ打ちをする人々、そして、通訳。当然、仕事に価値の多寡があるとは思えないものの、介護も同じようになくなっていく仕事とするならば将来は見えない。

13）　就労支援に駆ける【2019.12.13】

主宰のＫ氏が新しい仕事をはじめるらしい。

筆者のＫ氏のイメージは療育である。実際、障害のある子どもさんとプールに遊びに行った際の彼の知見は深遠なものがあった。

「でもな、障害者の就労やねん。」

東大阪市の事業団で、身体障害者の地域生活支援を携わっていた筆者が、突然の辞令で療育センターに配置転換になり、入れ替わりにＫ氏が療育センターから就労支援の場に移された。辞令交付式は異様な雰囲気でＫ氏の異動の衝撃が大きかったのだろう。私などは影が薄い。

カフェ・ふくろうのフィクサーはＫ氏である。今回のカフェでは、そのＫ氏の転職を機会として、いままでの障害者就労の25年の歩みを発表いただいた。

25年前に訓練所に異動となった当時は、利用者は就労支援というよりも生活支援に重きをおいた

対応が多かったとのことである。訓練所自体は公立であるだけに、退所期限も定めれていた。まさに親亡き後の対応がクローズアップされた。

Ｋ氏は、公共職業安定所の事業を利用しながら、就労支援の先駆けとして何人もの利用者を一般就労に導いていく。

「現実と折り合うことが肝要だ。折り合っていくことのなかでモチベーションが上がる。」

当時の国の政策もあと押しになり、相当成果はあがったが、当然、失敗するケースも生まれる。

カフェ・ふくろうは特定非営利活動法人ライフ＆ケアのショップさくらを拠点としている。さくらの立ち上げもＫ氏は絡んでいる。再訓練と癒しの場としての役割を期待してのことだ。

障害者の法定雇用率の引き上げや、グループホームの整備などの社会的な変化を背景に、Ｋ氏はますます純粋に障害者の就労支援に辣腕を振るうようになる。

「仕事は人を探すことから始まる。」

カフェのメンバーを前にして、Ｋ氏はこう言い切った。

基本、就労の取り組みに対する姿勢は大きく変わらない。まずは、「運」や「タイミング」を活かすことである。また、訓練所や事業者に出入りする業者はキーパーソンだ。

「やまちゃん（筆者のこと）、頼むわぁ。」

カフェのメンバーもよく聞くセリフである。なにせ、無駄でもなんでもチャンスを増やすことだ。Ｋ氏の姿勢は変わらない。

Ｋ氏は、利用者を「できる」「できない」で判断してはいけないと戒めている。介護職不足の介護補助という新たなニーズの開拓や、ハローワークの活用など、利用者の人との出会いをサポートするなかで、彼らが新しい生活スタイルを切り開いていくことを、自らが楽しめるような支援がこつであるとＫ氏は強調する。

人柄という言葉が浮かんでくる。なにか憎めない。Ｋ氏にはそのような雰囲気がある。

ソーシャル・ワークは人格を武器にすることが求められるという話を聞いたことがあるが、Ｋ氏の実践も近いものがあるのだろう。

14）　レクリエイム【2020.1.17】

４年カフェ・ふくろうを続けた。10年ひと昔というが、それぞれにメンバーにも変化が訪れる。一枚の年賀状がメンバーに関係の深いＴさんの逝去を伝えた。筆者とは同じ事業団で仕事もした仲間だ。休日には山に出かけたり、夜によく麻雀の卓を囲んだ気のいいひとだった。声が大きく元気だったのに。数年前、脳梗塞を起こされ主宰のＫ氏とお見舞いに行った。それが考えてみると最後の別れになった。

カフェの常連Ｓさんは、とにかくスケールが大きい。からだもクマのようないかつい体格である。彼の事業者としての仕事ぶりは、正直ブルドーザーみたいに驀進するというイメージだ。もともと

福祉とは全く関係のない仕事をしていた彼は、文字通りビジネス経営者としての成功をほとんど手に入れていた。でも、何かが違う。そう感じた。そして、まったく畑の違う福祉の第一線に飛び込んだ。ベンチャーそのものである。

既存のサービスをこなすのではなく、彼の中にこだわりがあった。障害の有無にかかわらず働くことを目指すこと、医療と福祉の接点を考えること。様々な企業を巻き込み、様々な人を巻き込み、社会福祉基礎構造改革後のコンシューマリズムによる福祉サービスの現場を切り拓いていった。

グループホームは、カフェ・ふくろうのなかでもよく話題になる。施設入所がほかの障害種別と比べ、極端に多い知的障害者にとり、グループホームの存在は新しい可能性を広げたことは間違いがないだろう。ただ、第3の施設という批判が如実に表すように、生活を暮らしを引き受けることは、当事者の高齢化とあいまって複雑な課題を事業者に突き付けている。

Ｓさんは、どうしても、重度であれば重度であるほど医療を組み込んだグループホームが必要だと考えた。そこで、パートナーにベテランの看護師のＨさんを招き、訪問看護ステーションを立ち上げる。そして、その発想は薬局の経営までに幅を広げる。つまり、グループホームを起点として、看護師の訪問、薬剤の確保と、医療を組み込んだグループホームのシステム構築を目指したわけである。これが、もうからない。ほとんど手弁当で賄わなければならない。

久しぶりにＳさんがカフェに顔をだした。毎日が忙しくなかなか参加できなかったのだろう。現況の報告を求めると彼は驚くべきことをメンバーに告げた。

「３日前にパートナーのＨさんがが亡くなりました。不整脈で、あっというまで。」

あまりにも、重い言葉にメンバーは言葉を失った。

Ｓさんは、経過を訥々と話された。相槌をうつ、でも返す言葉は見つからない。言葉をかかけるには余りにも彼は憔悴していた。

会が終わった後、Ｓさんが声をかけてくれた。

「救われました。皆が同じ姿でそこにいてくれて。」

カフェ・ふくろうを陰ながら支えてくれるＹくんがＳさんに連絡したそうだ。Ｓさんは

「これだ。」

と感じたそうである。

主宰のＫ氏がよく言う言葉なのだが、

「カフェ・ふくろうにくれば何とかなる。それが理想だ。」

という言葉が思い出された。

居場所、仲間のいるところ。カフェ・ふくろうの役割や今後の展開を考えさせられた回である。

15）　津久井やまゆり園【2020.２.７】

津久井やまゆり園の話は避けて通れない感がある。2016年７月に起きたこの利用者殺傷事件は、

近年、頻発する障害者施設や高齢者施設での虐待事件が行きつくところまで行きついてしまったという感さえ私たちに与えてしまう。

カフェでも時々話題となってきたが、今回は改めてディスカッションのテーマにしようと考えた。

当たり前であるが、メンバーの受け取りは深刻である。

「自分たちのやってきたことを全否定された気がするよな。」

あるメンバーが呟いた。

実名報道がされなかったことも話題になった。SNSでは２重の殺人であるとの報道もあった。

そもそも、今回の事件は入所型施設で起こっている。戦後の福祉サービスの提供は施設収容主義であった。そのことの是非はともかく、重度の知的障害者を固めて処遇したことの結果にも思える。

「様々な理由があるのよ。」

主宰のＫ氏は家族の立場を慮る。実名報道すれば二重三重に家族の苦しみが増えてしまうというわけだ。

被告の男に、裁判の中で家族が問いかける。

「君は、今幸せですか。」

「幸せではないです。面倒くさい。いや、その言葉が失礼なら、自由がない。」

施設の虐待については、たびたびカフェでも話題に上った。隠しカメラの小型化や社会的な風潮から暴力問題はマスコミで度々取り上げられる。それ自体は決して悪いことではない。暴力は許されない。でも、それでは割り切れない施設での利用者との対応があるのも現実だ。マスコミのテレビに出てくる映像は、まさに20数年前は施設の常態であったとも指摘できる。飛び交う怒号、利用者の束縛、そして暴力。そのような修羅場の中で施設職員は体をはって強度行動障害の人々に立ち向かった。そんな思い出をカフェのメンバーは口にする。

あれは許されないことだったのだろうか。

津久井やまゆり園の事件は何かが違う。そのような極限の世界で利用者とともに不条理に対峙してきた職員たちの思いを、一気に抹殺した感じを受けるのだ。やまゆり園の利用者や家族とともに私たちのなにかとても大切にしてしているものが壊されたような気がする。人間の尊厳というような言葉では語りつくせない大切なものが。

虚無感がカフェを包んだ。

おりしも、これから始まるコロナ禍を予想できる人間はその時点ではどこにも存在しなかった。横浜の港にはダイヤモンド・プリンス号が横付けされ3700人の乗員・乗客が上陸を拒まれていた。その後、船はクラスターの温床となり複数の乗客が命を落とした。知らないことには恐怖がつきまとう。そして、その結果悲しい事件が起こってしまう。

津久井やまゆり園で起こった事件を私たちはどう読み解くことができるのかが気になる点である。

３．分析と考察

では、前述の15回のカフェ・ふくろうのディベートされてきた内容から考察できることを以下の３点にわけて述べてみる。一つは、コンシューマリズムの福祉サービス提供の効果とその課題、２つは地域包括システムの拠点としての可能性、そして最後に事業者に求められる社会福祉の原点の３つである。

１）　コンシューマリズムの福祉サービス提供の効果とその課題

2000年の介護保険の導入、それを基盤とした障害者総合支援制度の創設は当事者の権利性を土台とした利用契約制度をそのサービス提供の基盤としている。言葉をかえれば、措置制度からコンシューマリズム（消費者主義）の福祉サービス提供への転換である。そのことによる効果と課題がカフェ・ふくろうのディベートの中から見えてくる。

カフェ・ふくろうの参加者は基本、筆者を含めて主宰のＫ氏の人間関係がその構成に影響を与えている。つまり、Ｋ氏が所属していた事業団のOBやその活動を支援してきたメンバーと、最近東大阪市で福祉サービスを事業として取り組む若者たちのメンバーとが大きなグループとして分別することが可能である。よく、カフェ・ふくろうのディベートのなかで過去の措置制度の役割を見直す論議が目を引いた。とくに、福祉事務所をはじめとして、昔のワーカーには猛者がいて、かつ強力な個性に基づき利用者の支援を深く推し進めた実績があるという意見である。この意見については、後者の若者たちのグループにはあまり支持されなかったように筆者は感じている。正確にいうと話がかみ合わないのだ。

利用者の生活支援の責任はどこにあるのかという話題が繰り返された。福祉の経験のない全く違う職業から転職した若者たちのグループには、行政をはじめとした公の機関による福祉サービスの介入や調整に関する期待感はあまり感じられなかった。むしろ、様々な困難ケースに向かい合ったときに、その介入は経営にとり、むしろマイナスである場合が多く、行政との折衝は、ほとんど無意味であるという厳しい意見も聞かれた。行政は何もしてくれない。だから、自分たちで対応しなければならない。

前者のグループのメンバーには、むろん行政にかかわったメンバーの存在もあるが、福祉事務所をはじめ、公立の施設従事者の活躍のエピソードなど、公の福祉サービス、いいかえれば措置制度への信頼があるように感じられる。

これは、いうまでもなく、福祉サービスの提供方法が措置制度から利用契約制度に移行した社会福祉基礎構造改革の潮流が大きく影響する。先ほどのグループの分け方においても前者と後者の端境はまさにこの社会福祉基礎構造改革であった。

では、コンシューマリズムの福祉サービス提供の効果とはどのようなことが指摘できるのか、

３点あげてみる。

一つは、単純に地域における在宅サービスが拡大したことである。介護保険導入時にも保険を作っても肝心のサービス提供を行う事業者がどれほど確保されるのかという心配がなされたが、ほぼ杞憂に終わった。福祉ビジネスという言葉がよく使われるようになったこともその証左と考えられるが、いままでにないサービス提供を行う事業者が増大したことは間違いない。

次に、そのことが施設収容主義を土台としていた専門家からの福祉サービス提供から、その枠にとらわれない一般の事業者の参入を招く効果があったのも見逃せない。事実、カフェ・ふくろうの参加者の多くは社会福祉を専門とする教育を受けていないメンバーが多い。このことは、社会福祉が専門家と言われる人々や、一部の利用者の世界から一般化された、また普遍化されたことは間違いない。

最後にこの在宅福祉のサービスの拡大や普遍化は、いままで専門の人々の中に留まっていた福祉ニーズを顕在化させた効能も大きい。とくに、カフェ・ふくろうのメンバーは知的障害者の支援を行う事業者が多く、グループホームに関わる問題や課題がテーマになることが多かった。そこには、従来措置制度の大きな課題である「親亡き後」の利用者の処遇に関わることよりも、むしろ地域生活を実際に営む際の、地域との齟齬や医療問題など実際のテーマが話し合われる傾向が見逃せない。

では、デメリットといえばどのようなことが言えるのだろうか。これも３点にわけて考察してみる。

一つは、サービス提供の拡大により、専門性に欠けたサービス提供が行われているという懸念である。よく言われることだが、自閉症に代表される対人接触に問題のある利用者の対応を、何も知らないスタッフが行う事の問題点などが典型例である。サービス事業者がその立ち上げの経緯もあるが、まったく社会福祉の連携の蚊帳の外にいることは問題である。その中で行われる支援の質については覚束ない。

次に、コンシューマリズムによるサービス提供が、経営の問題も絡みながら硬直化している事実である。事業者は利益を上げない限り経営はできない。当然ながらサービス提供は介護保険や障害者総合支援サービスの報酬に大きく縛られる現状がある。カフェ・ふくろうのディベートのなかでも、どこまで支援を行わなければならないのかという問いかけが多く出ていた。

最後に責任の問題である。コンシューマリズムの根底にあるのは、自己決定、自己責任である。その責任をとれない人に関しては成年後見制度が対応する。成年後見制度に身上監護が入っているのもその問題が背景にある。先ほども述べたが、カフェ・ふくろうのディベートのなかでどこまで支援をするべきかという論議があったが、これを言い換えるとどこまで事業者が責任を取ることができるのかということが話題に上った。限界があるという意見まで出ていた。

すこし、まとめてみる。現在の社会福祉サービスの提供は、介護保険や障害者総合支援制度に留まらず、生活保護の自立支援や児童サービスにまで広範囲に民間の事業者によるものが増えている。これを福祉ビジネスと定義づけることの是非はともかく、そのサービス提供のメカニズムにコンシューマリズム（消費者主義）が導入されていることは事実である。

商売や経営という言葉がすべてを表わすわけではないが、実際の現場のなかでの取り組みやそれに伴う苦悩がカフェ・ふくろうのディベートのなかで語られている。福祉サービスの提供をコンシューマリズムを基盤として行うことの軋みを感じてしまう。

2） 地域包括システムの拠点としての可能性

次の論点として、カフェ・ふくろうの活動により見えていた地域包括システムの拠点としての可能性について論じてみる。一つは、ゆるやかな繋がりのなかでの対応困難な利用者への支援の有用性であり、いま一つは、支援者の悩みを語れる場としての効果という視点で考察してみる。

地域包括システムは周知のとおり、厚生労働省が打ち立てた介護保険サービス提供を支える地域システムづくりの名称である。その目的はいかなる高齢者でも障害者でも住み慣れた地域での暮らしを成り立たせることであり、フォーマルには地域ケア会議や障害者の分野では協議会の取り組みがあげられる。いずれにしても、その取り組みは行政やそれに類する団体がその業務を担う。

カフェ・ふくろうはまったくインフォーマルである。そのことの強みが副産物をうみだすことになった。前述したが、コンシューマリズムによるサービス提供が、経営の問題も絡みながら硬直化している問題点は指摘した。これは、サービス報酬の明確化が報酬の対象でないサービス提供に事業者が積極的に踏み込めない問題を引き起こしている。一番、わかりやすいところで言えば接触困難や問題行動のある利用者への取り組みにその問題は顕在化している。

措置制度の有用性は、このような問題行動のある利用者を一番に介入できる利点は大きかった。選別主義による効能である。普遍主義は利用サービスの平準化には大きな効能があるものの、アウトリーチ的なサービス提供にはあわない。理由は簡単で利益にならないからだ。

カフェ・ふくろうのつながりには、この利益による関係性は薄い。メンバーが関わるケースの中で問題があるものを即時的に対応できるメリットがある。まさに、ゆるやかな繋がりのなかでの対応困難な利用者への支援を考えることが可能であった。実際のケースとして様々なトラブルメーカーの利用者がボヤを出し、利用していたグループホームから退去を求められたとき、緊急避難的に引き受けてくれた事業者がメンバーであったり、家庭内暴力で家族崩壊に直面したケースに奔走したのもメンバーであった。

無論、例で挙げたケース対応を主眼として、地域ケア会議や協議会がフォーマルに存在する。しかし、行政主導で作られた組織には、カフェ・ふくろうにおけるような滑らかな柔軟的な対応は困難である。基本的にそのような緊急時に対応する社会資源として重要なのは人間関係の練りこみである。この練りこみがないと人間関係における信頼や信用は担保できない。その意味でもカフェ・ふくろうの活動は地域包括システムの拠点としての可能性を有する。

また、上記のような人間関係の練りこみは、支援者の悩みを語れる場の存在が不可欠である。カフェ・ふくろうの活動は、メンバーの協力もあり5年近くの継続性を保つことができた。その中でも、

メンバー１人ひとりの立場や状況の変化が伺われた。なかでも、大切なパートナーを喪失する経験なども語られる場面もあった。このナラティブな語りの場面はメンバーにおいても多くの示唆と感情の交流を得る機会となったことは見逃せない。そのことが、コンシューマリズムに基づく利害関係の枠外でのゆるやかであるが、柔軟性に富んだ地域包括システムとしての役割を担うことを可能としたのである。

３）事業者に求められる社会福祉の原点

さて、最後に事業者に求められる社会福祉の原点とは何かという点について論じておきたい。筆者は社会福祉について大事なものはないかという問いかけを常に考えてきた。何も手掛かりがないわけではなく、ノーマライゼーションやリハビリテーションなどの理念に大きな影響を受けてきた。

しかし、カフェ・ふくろうの主宰のＫ氏は、理念の大切さはおさえながらも、現実の様々な社会福祉の営みの中から見えてくるものこそが大切であるということを指摘した。私たち両者のなかでよくディベートの軸になったようだ。つまり、見逃せない事実があるという論点だ。理念から考えるのではなく、現実におこっている問題からアプローチしていく。目の前にいる人々の「生きづらさ」にこそ社会福祉の原点が存在するという立場だ。よくＫ氏が口にするのは綺麗ごとでは済まない現実があるという言葉である。

私見を述べておく。Ｋ氏の理屈に沿って、カフェ・ふくろうのメンバーたちが論じてきた様々な問題のなかで共通する「生きづらさ」とは何かという疑問が浮かぶ。それは、まさに今回の論文でのべていたコンシューマリズムを代表とする市場経済システムからの逸脱を意味していないかと考える。市場経済において価値のあるものは、私たちの暮らしに有益なもの、健康、美しさということになる。その立脚点は功利主義であり、かつ背景には優性思想がある。利益を生産するものこそが最大の受益者であるこのシステムにおいては、利益を生まないものは様々な形で排除される。貧困や差別、社会的な孤立は排除の代表例である。

では、この優性思想に対抗できる考え方とはなにか。やはり、生存権保障である。そこに存在するだけで価値があると考える社会福祉の原点を今一度問いかけるべきである。

しかし、現状のカフェ・ふくろうにあつまる支援者たちの顔色はさえない。次から次へとおこる福祉課題に振り回されている印象をうける。自身が取り組む問題の大きさに押しつぶされてしまうような感覚さえ感じてしまう。社会福祉の原点とはなにかのディベートをナラティブに深める拠点が必要である。上記の筆者の私見はともかくとして、複雑な現代社会が引き起こす問題を、直面する事業所や施設を離れ、同じ志をもつ人々の前でカタルシスする経験はやはり貴重である。

そのような練りこんだ人間関係の中で、アウトリーチ的なケース対応を行うことが柔軟で即時的な対応に繋がるのである。

おわりに

さて、社会福祉サービスは順調に成長しているのか、はたして停滞しているのかどちらであろう。無論、その結論は次世代の研究者たちの手に委ねられることとなるだろう。その意味でも、今回の論文ではコロナ禍やソサエティ5.0に変容する社会など、今を生きる福祉サービスの担い手に焦点をあて、カフェ・ふくろうという小さな試みの可能性と成果を記録することを主眼に、その分析もふくめて書き下ろしたものである。無論、その分析や記録の風景は筆者のバイアスによる部分が多い。読み手の人々の立場からは様々な批判もあることも甘受したい。最後にカフェ・ふくろうの主宰者Ｋ氏をはじめメンバー各位、そのディベートの場を提供いただいた東大阪市の特定非営利活動法人ライフ＆ケアのショップさくら、そして、本研究の発表の場をいただいた大阪城南女子短期大学に謝意をのべたい。

参考文献

1）ヴルフェンスベルガー　中園　康夫　清水　貞夫訳 『　ノーマライゼーション－社会福祉サービスの本質』 学苑社　1982
2）黒沢　貞夫　　『　人間の尊厳と自立　－生活支援場面における「人間」の理解』建帛社　2009
3）寺本　晃久　末永　弘　阿部　耕典　岩橋　誠治 『　良い支援　－　自閉症の人たちの自立生活と支援　』生活書院　2008.
4）中野　哲明　伊藤　博美　立山　善康　編著 『　ケアリングの現在　－倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて－』晃洋書房　2006
5）ミルトン・メイヤロフ　田村　真　向野　宣之訳 『　ケアの本質　－生きることの意味－』 ゆみる出版　1987

（やまもと ながと ： 教授）